〔ふるさとの宝№２６〕

福原の池さんと池さん原

雲陽誌に「水越池、福原と云ふところにあり。旱魃の時此の池を掃除してあまひきすれば、必ず霖雨を催す。今に至りて旱歳此に祷。」とある。尼子・毛利の合戦の地であり、私たちの小学校二年生時の遠足の場所でもあった。別名池様原（いけさんばら）。福原から水越峠に向かう小高い丘陵の地に、水を満々とたたえた沼地が存在する。そのほとりに「池様」と呼ばれる神社がひっそりと建っている。社の中はがらんどう。普通ならご神体があってもよさそうなのだが、壁もなくふきっさらしの小屋である。実はこの神社ご神体は池なのである。

その昔、時は永禄元年、高野山久意（庄原市高野町蔀山城主首藤通信）は安芸の毛利元就の石州出陣に呼応して、尼子氏と共に石州に出陣していた三沢氏の手薄に乗じて三沢攻めを思いつく。この情報をいち早く手にした三沢勢は、精鋭部隊三百を組織して、上阿井木地屋へ待ち伏せ攻撃に向かう。切り立った山の中に隠れて阿井街道を下りくる高野山勢を一挙に攻撃。このくだりを雲陽軍実記はこう記している。「・・三百人ばかりの随兵、もっとも也と篠原（しのんばら）と云ふ所の深山幽谷に埋伏して待ちけるに、何心無く久意が勢五百騎通りかかるを左右前後より矢を放つこと蝗の飛ぶが如く射立てければ、道は狭し布引（一列）にならび立ちたる高野山勢、的になって忽ち手負ひ百余人出来ける故、久意下知して抜連れて打ち散らせ、敵は小勢なるぞと云ひければ皆抜連れて防ぎけれ共、待伏せの者は山上にあって、槍長刀にて真逆さまに薙ぎ落としける故、久意大いに敗亡して、討たるる味方をも顧みず、我逸足に上阿井さして駈け出でける。」

敗走する久意勢は吉田へ越すべく、槇原あたりから鯛の巣のふもと半谷を経て福原・芦谷へと向かう。三沢勢は地の利を生かしじわりじわりと追いつめる。途中沢山の家来を失いながらもひたすら逃げる久意の安全逃亡を図るため、久意の家臣白水八郎左衛門（軍実記では白山何某となっている）は福原水越の地で三沢勢を迎え討つことにした。当時は大将同士の一騎打ちが相場であったから、三沢勢の中で大雄剛毅で知られた平田弥四郎が相手となった。互いに馬上で太刀を振りかざし切りあったが、勝敗は一向に決せず馬だけがくたびれていった。そうこう切りあううち白水の馬が沼に脚を落としてしまう。この沼は底なし沼とも言われ、馬がもがけばもがくほど四脚は沼にめり込むだけで、遂に馬は動けなくなった。一騎打ちができなくなった平田は、沼に入ることは危険と考え、「唯遠矢にて射すくめよ」と家来に命じることしかできなかった。四方から矢を射られた白水は数十か所の矢傷を受け、落馬して沼に沈んだ。一騎打ちの勝利は相手の首を取ることにあったがそれはかなわぬことであった。

その後、この話を伝え聞いた村の人たちは、不運にも沼にはまり込んだ馬と白水のこ

とを哀れに思い、この沼のほとりに祠を立て冥福を祈ったという。現在も七月初め、集落の人たちが集まってお祭りをしている。心優しき地域の人々の心根を伺うことができる伝承である。

この池は日照りの年にも涸れることはなく、福原の米作りを支えてきた。涸れないのは大山の赤松の池とつながっているとか、杵築の灘に通じているとか、昔の人たちの想像力の豊かさには驚くほかはない。また一説には、「この池で女性が体を洗っていたら、毛利方の武士に切り殺され、これ以後この池に参拝すると婦人病が治るとか。」「池さんに参れば腰から下の諸病疾患に効き目があるとか。」近郷の者のみならず、大原・飯石からもたくさんの参詣人があったと伝えられている。

（上阿井合戦の詳細は仁多町誌に在り、絵は藤原東氏）

池様の祭礼

杠文書から追記

次に史実として更に一つ

松江藩、第七代藩主治郷公（茶人大名と有名な不昧公）をはじめ、第八・九・十代共代々の藩主が櫻井家へ御成（御来駕）になっておられる。

不昧公の長男で第八代藩主月潭院斎恒公は、文政二年（一八一九）御来檀され、旧九月十七・十八日に二泊され櫻井家周辺の紅葉に満足され、翌十九日出立、町可部屋で御昼、そして一路福原へと歩を進められ、水越が御駕籠立場となっているから斎恒公は水越の池周辺で御駕籠から降りたたれ、周囲の景観を愛でられ、御野立（お茶）を召されながら、この池さん原の小高原から鯛巣山を中心として展かれる山々の紅葉をしばし楽しまれ満足して吉田へ駕籠を進められた。第九代・十代藩主も同様であったと思われる。御成りの行列は約二百人であった。